

氏名	かいらん 海蘭
授与学位	博士(学術)
学位記番号	学術(環)博第236号
学位授与年月日	平成29年3月24日
学位授与の根拠法規	学位規則第4条第1項
研究科, 専攻の名称	東北大学大学院環境科学研究科(博士課程)環境科学専攻
学位論文題目	17世紀前半におけるモンゴル語檔案文書の言語学的研究
指導教員	東北大学教授 栗林 均
論文審査委員	主査 東北大学教授 栗林 均 東北大学教授 岡 浩樹 教授 松川 節 (大谷大学)

論 文 内 容 要 旨

本研究では、17世紀前半に書かれたモンゴル語檔案文書(以下、モンゴル語檔案文書)である『満文原檔』と『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』におけるモンゴル語檔案文書を研究対象にして言語学的研究を行った。

『満文原檔』は、台湾の国立故宫博物院より、2005年に出版された清太祖、太宗時代の檔案文書の写真版による複写資料集である。『満文原檔』は、ほとんどが満文(満洲語)による檔案文書であるが、一部にモンゴル語および漢語で書かれた檔案文書が含まれ、満洲モンゴルの交渉に関わるモンゴル語檔案文書が47件ある。これらを【1】～【47】とした。その中で、文書【1】から文書【42】までは清朝成立以前、つまり、1635年までの檔案文書であり、文書【43】から文書【47】までは清朝成立年、つまり、1636年以降の檔案文書である。本論では、『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書を「文書A」とした。

『十七世紀蒙古文書檔案(1600-1650)』は、中国第一歴史檔案館に所蔵される清朝成立以前から清朝初期にかけての対モンゴル交渉、統治に関わるモンゴル語檔案文書計111件を写真版で収めた資料集である。この文献は大きく2部に分かれる：第1部は、"manju mongyul-un qarilčayan-u teüken-dü qolbuγda=qu bičig debter"(満洲-モンゴル交渉の歴史に関する文書・檔案)であり、ほとんど1636年以前のモンゴル語檔案文書であり、61件収録されている。第2部は、"dayičing ulus-un γadayadu mongyul-un törü-yi jasa=qu yabudal-un yamun-u temdegle=gsen debter"(大清国の理藩院の記した檔案)であり、理藩院による記録が50件収録されている。第1部の内容は、清国成立前に満洲側がモンゴル側に送った文書の草稿、あるいは写し、およびモンゴル側が満洲側に

送った文書の原本、あるいは写しである。第2部は、清朝成立後の行政機関である理藩院が、モンゴル各部からの貢品、或いは清朝からモンゴル各部への下贈品を列記したものである。本論では、第1部を「文書B」とし、第2部を「文書C」とした。

16世紀後半以降、チベット大蔵経カンジュール(kanjur)、タンジュール(tanjur)をはじめ、大量の仏典がモンゴル語に翻訳された。その際、モンゴル文語の字形や綴りが統一され、文章語として規範化が進められた。この時代以降の仏典に用いられる規範化された言語を「古典式モンゴル文語」と呼んでいる。モンゴル文語で、チベット語やサンスクリット語の音を写すために、アヨシ・グーシによって、モンゴル文字を変形した「アリガリ(ali yali)」と呼ばれる文字が作製されたのもこの時期(1587年)である。また、仏典以外にも、『黄金史(アルタン・トブチ)』、『蒙古源流(エルデニン・トブチ)』、『黄史(シラ・トージ)』などの多くの年代記や史書が編纂された。従来の研究では、この時代は、モンゴル言語の歴史において「近代モンゴル語」と呼ばれ、この時代のモンゴル語は「古典式モンゴル文語」によって書かれたといわれている。

本研究が明らかにしようとする課題は、次の三点に集約される。

- (1) モンゴル語檔案文書は、清朝の支配者が檔案を重鈔する際に、また歴史書を書く際に、参考にしていた資料である。そのため、モンゴル語檔案文書は、後にでた檔案や歴史書でどのように扱われていたか。
- (2) 「古典式モンゴル文語」と違って、政治的やり取りの中で作成されたモンゴル語檔案文書の字形と文法は、どのような特徴を持つのか。
- (3) 清朝が成立以前に作成されたモンゴル語檔案文書と成立以降に作成されたモンゴル語檔案文書には言語的にどのような違いがあるのか。

本研究で用いた研究方法は(1)比較方法と(2)ローマ字転写方法である。

(1) 比較方法

比較方法では、1)モンゴル語檔案文書(「文書A」、「文書B」、「文書C」のすべてを指す)と「古典式モンゴル文語」を比較する方法と2)「文書A」、「文書B」、「文書C」の三つの檔案文書を比較する方法である。

1)モンゴル語檔案文書と「古典式モンゴル文語」を比較する方法は、モンゴル語檔案文書に現れる字形と文法的語尾をN.Poppeの*Grammar of Written Mongolian*(Wiesbaden, 1954)の字形および文法的語尾と比較することである。

「古典式モンゴル文語」の文字と文法を当時の文字と文法の規範であると見なし、それと異なるものは規範からはずれたものと見なす。その規範からはずれたものは何か、なぜ生じたのかを検討する。

2)「文書A」、「文書B」、「文書C」を比較する方法は、「文書A」、「文書B」、「文書C」の三つの檔案文書に現れる字形と文法的語尾を比較することである。この三つの檔案文書を比較することによって、清朝の成立前と成立後のモンゴル文語の変化を検討する。「文書A」には計47件の檔案文書があり、こ

れらを【1】～【47】とした。その中で、文書【1】から文書【42】までは清朝成立以前、つまり、1635年までの檔案文書であり、文書【43】から文書【47】までは清朝成立年、つまり、1636年以降の檔案文書である。本研究では、便宜のため「文書 A」を清朝の成立前の檔案文書としている。

(2) ローマ字転写方法

ローマ字転写をする方法でデータベースを作り、それを分類や分析して研究を行った。本研究のローマ字転写は、モンゴル文字の識別情報(文字の種類を区別する情報)だけでなく、文字の字形や表記に関する情報を含め、できるだけ元の表記が再現できるように配慮するとともに、モンゴル文語の解釈に資するために文法的情報を付加している

モンゴル語檔案文書の言語学的研究を行うことによって、その特徴を次の三つにまとめることができた。

(1) 『満文原檔』におけるモンゴル語檔案文書と『十七世紀蒙古文文書檔案(1600—1650)』におけるモンゴル語檔案文書の第 1 部、第 2 部の関連文献を考察することにより、これらの若干のモンゴル語檔案文書が共通して後の檔案や史書に満洲語で翻訳されていた。その翻訳過程で生じた、語句の誤った翻訳から、幾つかの檔案文書の原文はモンゴル語であったことを確認することができた。

「文書 A」、「文書 B」、「文書 C」に関する関連文献を検討した結果、それらは共通して、後の時代の檔案や史書を編纂する際に参考にされていたことがわかった。その際に、モンゴル語檔案文書が満洲語に翻訳されている。

「文書 A」の【1】は、従来の研究では見落とされていた檔案文書であり、本研究で新たに報告する文書である。

「文書 A」と「文書 B」の中の若干の檔案文書は、「満文原檔」が乾隆時代に「満文老檔」として重鈔された際に、満洲語に翻訳されて収録されている。「文書 A」では、47 件のうちの 30 件が「満文老檔」に収録されている。「文書 B」では、61 件のうちの 6 件が「満文老檔」に収録されている。

「文書 A」と「文書 B」には、同じ内容のモンゴル語檔案文書が含まれている。それは、「文書 A」の【15】と「文書 B」の【16】である。「文書 A」の【15】は、「文書 B」の【16】より内容が多く。「文書 A」の【15】の方は、そのまま満洲語に翻訳され、「満文老檔」に収録されている。

「文書 A」と「文書 B」の若干のモンゴル語檔案文書を「満文老檔」における満洲語訳と対照することによって、翻訳過程で生じた誤りから、モンゴル語檔案文書が原文である(満洲語から翻訳したものではない)ことを確認することができた。例えば、「文書 A」の【15】では、mori ton'uy「馬や道具」を満洲語で morin i ton「馬の数」と翻訳している。ここでの満洲語訳は文脈に合わない。

「文書 B」の【25】は、満洲側がモンゴル側に送った文書であり、モンゴル語の büri「毎」を満洲語で burtei「全て」と翻訳している。それは、モンゴル語の büri「毎」を бүр「全て」と誤ったためと考えられる。

(2) モンゴル語檔案文書の字形と文法的語尾を古典式モンゴル文語の字形と文法的語尾と比較するとモンゴル語檔案文書には、古典式モンゴル文語にない字形や文法的語尾が現れる。モンゴル語檔案文書の古典式モンゴル文語と異なる字形は、現代モンゴル文語と一致するのが多く、先古典式モンゴル文語の字形と一致する字形が少数である。古典式モンゴル文語と異なる文法的語尾は、現代モンゴル口語に対応するものが多い。つまり、現代モンゴル語の字形の基本な特徴は、モンゴル語檔案文書の字形に現れているほか、現代モンゴル語の口語的な特徴はモンゴル語檔案文書の文語中に露出する口語的な要素に現れている。

従来の研究では、16世紀後半からのモンゴル語は、モンゴル語史において、近代モンゴル語とし、この頃のモンゴル語は「古典式モンゴル文語」によって記録されていたとみなされている。しかし、17世紀前半に書かれたモンゴル語檔案文書の字形と文法的語尾の特徴から、それは、古典式モンゴル文語で書かれたものではないことを確認できる。

古典式モンゴル文語とモンゴル語檔案文書の字形を比較すると、モンゴル語檔案文書には古典式モンゴル文語と一致する字形があるほか、異なる字形もある。その古典式モンゴル文語と異なる字形の大多数は、現代モンゴル文語の字形と一致し、少数は、先古典式モンゴル文語と一致する。

モンゴル語檔案文書には古典式モンゴル文語と一致する文法的語尾が多く用いられているが、古典式モンゴル文語にない文法的語尾も含まれる。それらの古典式モンゴル文語と異なる文法的語尾の中には、先古典式モンゴル文語に使われていた語尾があるほか、多くの語尾は当時の、口語的要素と見なすことができる語尾である。その口語的要素は先古典期モンゴル語の口語資料に現れる文法的語尾に対応するほか、多くの場合は、現代モンゴル口語に対応する。

(3) 清朝が成立以前の檔案文書と清朝が成立以降の行政機関で作成された記録と比較すると後者は字形や文法には、古典式モンゴル文語や現代モンゴル文語の規範と近く、規範化が進んでいる。

論文審査結果の要旨及びその担当者

論文提出者氏名	海蘭 (かいらん)
論文題目	17世紀前半におけるモンゴル語檔案文書の言語学的研究
論文審査担当者	主査 教授 栗林 均 教授 岡 洋樹 教授 松川 節 (大谷大学)

論文審査結果の要旨

本論文は、17世紀前半に満洲族が清朝を建国する前後の期間に作成され保管されてきた檔案(とうあん)と呼ばれる公文書のモンゴル語を言語学的に分析・研究したものである。

研究対象としたモンゴル語檔案文書は次の3種類である：1.『満文原檔』と呼ばれる満洲語の檔案文書に散在する47件のモンゴル語檔案(文書A)、2.『十七世紀蒙古文文書檔案(1600-1650)』(1997)第1部所収の清朝建国以前の61件のモンゴル語檔案(文書B)、3.同書第2部所収の清朝建国以後の50件のモンゴル語檔案(文書C)。論文では、書かれた年代と書き手の異なる3種類の檔案文書について、それぞれの言語的な特徴を検討して、典型的な「古典式モンゴル文語」との違いを明らかにするとともに、3種類の文書に見られる共通点と相違点を比較・分析して、モンゴル文語が規範化されていく過程を検討した。

論文は、序論、本論(第1章～第3章)および結論からなる。序論では研究目的と意義、先行研究、問題の所在、研究方法を論じ、17世紀前半というモンゴル語資料の空白期とみなされてきた時代に属する檔案資料を研究対象として取り上げる意義が強調されている。この時代のモンゴル語檔案資料を研究対象として取り上げること、資料的な制約もあって従来の研究には無かったもので、本論文は新たな分野を開拓する研究として位置付けることができる。

本論の第1章では研究対象とする文献資料の書かれた年代、書き手、その内容を詳細に調査し、それらが後の時代に清朝の満洲語による公式の実録や再編纂された檔案にどのように利用されたかを明らかにした。それらを丹念に読解し、比較することによって、モンゴル語の原文が満洲語で「誤訳」されている実例を示している。

第2章は、モンゴル語檔案(文書A、B、C)におけるモンゴル文字の字形と綴りについて論じている。これは論文提出者が文書Aについて著書(『満文原檔』所収モンゴル語文書の研究』2015)にまとめた方法に従って3つの文書の字形と綴りを比較しながら論じたもので、原文の写真をスキャンした例を使いながら、多様な字形の現われを整理して、その特徴を明らかにしている。文書A、Bと比較して、文書Cの字形が現代モンゴル文語の字形に近く、規範化が進んでいることを具体的な字形と出現回数によって論証したことはこの論文における新しい知見となっている。

第3章はモンゴル語檔案(文書A、B、C)における文法的語尾に焦点を当て、名詞の曲用語尾と動詞の活用語尾の表記の特徴を論じている。曲用語尾や活用語尾の中には、古典式モンゴル文語とは異なる様々な綴りが現れるが、それぞれの現れを、より古い時代の口語資料や現代モンゴル語の口語(方言)資料と比較して、それらの多くが当時の口語が露出したものであることを論証している。ここでも、文書A、Bと比較して、文書Cの形が現代モンゴル文語の形に近く、規範化が進んでいることを具体的な出現回数によって示している。

結論では、本論で論じた17世紀前半のモンゴル語檔案文書の特徴をまとめている。

本論文は、先行研究の及ばなかった時代のモンゴル語の文献資料を扱ったパイオニア的な研究であり、古典式モンゴル文語とは異なるモンゴル文語の実態を明らかにし、字形の分類ではモンゴル語学の分野に新たな研究方法を提示するとともに、表記の多様さが当時の口語の露出であると論証して新たな知見を示した。

よって、本論文は博士(学術)の学位論文として合格と認める。